

野菜のアブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ等）

○ 被害と発生生態

若い葉や新芽に群がって吸汁・加害し、葉を黄変・萎縮させ、生育を著しく阻害する。また、排泄物(甘露)にはすす病が発生し、商品価値を低下させる。各種ウイルスを伝搬する種類もある。

山口県の野菜で問題となるアブラムシ類は、約 30 種あり、体色は種類や個体によって様々である。さらに、ワタアブラムシのように、個体変異の大きい種類もある。代表的な種類は、広範な野菜に発生するモモアカアブラムシ、果菜類に発生するワタアブラムシ、アブラナ科野菜に発生するニセダイコンアブラムシである。

通常は雌だけで子どもを生む単為生殖を行うため、短期間で急激に密度が高まる。生息条件が悪くなると有翅虫が出現し、新たな寄主植物を求めて移動する。モモアカアブラムシやワタアブラムシのように、夏と冬で寄主転換をする種類もある。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・有翅虫は銀白色を忌避する性質があるため、反射マルチ等を利用し、飛来を抑制する。
- ・施設や植物体を寒冷紗やべたがけシート等で被覆し、有翅虫の侵入を防止する。
- ・施設では、発生初期に生物農薬（天敵のアブラバチ類、テントウムシ等）を施用する。

(イ) 薬剤防除法

- ・発生の多い時期（春～秋）は、播種・定植時に粒剤を使用するなど、発生初期から防除を徹底する。
- ・ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ等では、有機リン剤やカーバメート剤、合成ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤等に対する抵抗性が発達した例があるので、薬剤散布後に効果を確認し、効果が低い場合は他剤に変更するとともに、複数の世代に対して同一薬剤の連用及び同一系統の薬剤の輪用は避ける。
- ・テントウムシ、クサカゲロウ、ヒラタアブ、寄生蜂などの天敵が定着できるよう、天敵に影響の少ない薬剤を使用する。

（※ 本基準 9 (5) 天敵等への殺虫・殺菌・殺ダニ剤、除草剤の影響を参照）



ワタアブラムシ(無翅・幼虫) ワタアブラムシ(有翅)

モモアカアブラムシ(無翅)



ニセダイコンアブラムシ(無翅)

ナス新葉の被害